



TITLE:

新星が発見された

AUTHOR(S):

---

CITATION:

新星が発見された. 天界 1943, 23(268): 322-322

ISSUE DATE:

1943-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168669>

RIGHT:

自分がいろんな場合に人にすゝめてゐる所である。つまり、黒點にしても、白紋や紅焰にしても、コルナ等にしても、太陽面上の南半球と北半球とでは、直接に關係は無いのだから、吾々は太陽を一つと考へず、むしろ、天には“二つの太陽”が存在するといふ想定の下に、あらゆる研究をすることは興味があると思ふ。ことによると、觀測者が分擔して、太陽の北半球のみを觀測する人と、南半球のみを觀測する人とが出来ても宜いわけである。

太陽面は子午線の東西に之れを二分することは出来ない。東半球上の現象は皆そのまゝ西半球へ移つて行くのだから、この兩半球は、決して南北兩半球の如く別々では無い。

(4) 太陽面上の白紋を系統的に觀察することは大に奨励すべきである。これには、南北兩半球について、更に東部と西部とに分類した方が宜いと思ふ。

(南北兩半球の太陽面の諸現象が相互ひに無關係である如く、白紋は、太陽の東縁と西縁とが餘り離れ過ぎてゐるため、これも相互に無關係と一應考へられる。従つて、白紋に關しては、天に“四つの太陽”が在ると考へても宜いわけである。)

(5) 紅焰の觀測は、伊達氏も熱心に實行してゐられるし、田上にも器械はあるから、毎朝の觀測を實行してゐる。しかし、これは一般のアマチュアに希望することは出来ないだろう。一寸特殊の分光器が要るのだから。

紅焰は非常に急激に變動するものだから、若し之れを觀測するのなら、毎日2~3回觀測する必要がある。それで、すいぶん多忙となり、従つて他の種類の觀測を放擲してかゝる程にしなければなるまい。紅焰を毎日一回ぐらゐ(しかも曇天には、當然欠ける)觀測するのでは、紅焰の真相はつかめないと思ふ。

(6) 分光太陽鏡(スペクトロヘリオスコープ)は分光太陽寫眞儀と共に重要なものであつて、殊に寫眞分光儀は職業家に適してゐるが、分光鏡の方はアマチュアに適してゐるものだから、これが幾つか我が國にも設置されると宜いと思ふ。田上には之を設けるつもりで、深さ7米の垂直孔が堀つてあるけれど、未だ設備は出来上つてゐない。これについて、最も大切な部分品はプリズム又はグレイチングである。高い能率のグレイチングが容易に入手し得るやうになるまでは、この設備は普及し得ないのは言ふまでもない。尤も、ヘール博士自身が筆者にかつて語つた如く、この分光鏡には未だ標準型といふものが無いのだから、今後いろいろと新型が發明される可能性もあるわけである。(終)

新星が発見された 近着の I. A. U. 回報 961 及 963 によれば、去る九月5日ドイツ國ホフマイスタ氏は驚座の牽牛星の返くに一新星(12等級)を發見した由。(詳細は急報 639 を見られよ。)